

ヴェロキラプトル：
【*Velociraptor. mongoliensis*】
の足



ヒヨコのわき道

ほら、君もこっちに いらっしやい



メガゾストロドン：【*Megazostrodon rudnerae*】
最初期の哺乳類

第47回 暗闇で、考えごとをしてみる？ 真夜中の哺乳類

「哺乳類登場。」

私たち哺乳類の祖先が、恐竜より古い時代に大繁栄した「哺乳類型爬虫類」であることは、何回かこのコラムで取り上げました。

恐竜時代の始まりである三畳紀には、そこから哺乳類が進化し、恐竜たちの足元で生きていた、というのによく知られている話でしょう。

では、具体的にどんな哺乳類がいたかご存知ですか？

これが大抵の場合、小型で、華奢で、地味～な動物ばかりなんです。

そのせいで、彼らについて知ろうとした研究者たちの前には、大きな困難が立ちふさがっていたのです。

「小さな小さな動物化石？」

遠い過去の動物の姿について知りたければ、まず化石が見つからないと話になりません。

でも、大きくて丈夫な骨を持つ大型恐竜や、マンモスならともかく、森の中に暮らしているハツカネズミのように小さな動物が、一体どうやって、無事に化石になってくれるのでしょうか？すべて分解され、土に還ってしまうのが普通でしょう？

せいぜい最も固くて丈夫な「臼歯（奥歯）」と、顎の骨のかけらが残るくらいでしょう。

では、それをどうやって見つければいいのか？

地面に這いつくばってルーペを握りしめ、がれきの中から米粒のような歯の化石を探し出す発掘作業となるのです。まるで何かの精神修行のようですね。化石を発見する前に、思わず悟りを開いてしまいそうです。そのような研究をされる方々は、きっと僧侶の職にも向いているのでは？

「奥歯で命名？」

そんなわけで、恐竜時代を生きた哺乳類達は、「梁歯類 Docodonta」「多丘歯類 Multituberculata」「三錐歯類 Triconodonta」「相称歯類 Symmetrodonta」など、専ら臼歯の特徴からグループ名が付けられています。もちろんそれは、もともと歯の化石しか見つからないから。ラテン語名の「～donta」とは、正に歯を意味しています。

彼らの復元図が描かれることも多いのですが、それは推測、いやいや、想像図に近いものも多いのです。

もしも全身骨格に近い標本が見つかるものなら、それはこの道の研究者たちにとって「最高の至宝」。生涯をかけて研究する価値があるというものです。

「夜中にそ〜っと。」

とても小さな、か弱い存在だった恐竜時代の哺乳類達が昼間にちよろちよろしていたら、恐竜たちにパクリ。あまりにも危険極まりない。

巨大な恐竜は個体数が少なかったのですが、ちょうど小型哺乳類を付け狙いそうな、大きめのニワトリか、キツネぐらいの小型肉食恐竜は、うじゃうじゃいたはず。

そこで、哺乳類達が選んだのは、夜に活動して生きること。

肉食恐竜は鳥に近い生き物だったので、夜は休んでいたと考えられます。それなら危険は少なくなりやすよね。

中には比較的大型で、おなかの中から恐竜の赤ん坊の骨が見つかった哺乳類化石も見つかっています。哺乳類が、恐竜を捕まえて食べていたというのです。これを聞いて、「お〜。当時の哺乳類もなかなかやるじゃん」と評することもあるようですが、

これも恐竜の巣に、夜中にそ〜っと、盗みに入っただけなのかも。

そして、その「長い夜の時代」は、哺乳類達の身体に重要な方向付けを与えたのです。

「恐竜とは異なる感覚のあり方？」

もし、あなたの身体がハツカネズミほどの大きさだったなら、小さな身体からどんどん逃げていく体温を維持して活動するために、一晩のうちに自分の体重に匹敵する量を食べなくてはなりません。そんな大量の食べ物（昆虫など）を夜の森で探すとしたら、一体どうすればいいのでしょうか？

夜中の森では視覚は役に立ちません。しかし、大量の食べ物が必要なのですから、触覚に頼った待ち伏せなどもっての外です。聴覚には期待できますが、相手が音を立ててくれないと役に立ちません。

あなたが頼るべきなのは、嗅覚ではないでしょうか？

ただし、獲物の臭いに敏感になれても、餌にするべき昆虫がそこにいたのは、ついさっきかも知れないし、何時間も前かも知れません。

これは敵である恐竜についても同様で、恐ろしい敵の臭いがしても、それは今肉薄しているかもしれないし、とっくに遠ざかった後かも知れません。臭いの種類と強弱にくわえて、それが何時のものなのか、「時間」という概念をあわせ持たなければなりません。

恐竜時代の夜の森は、私達の祖先である哺乳類達に「臭いについて考えること」を要求したのです。これは脳全体の前方に位置し、嗅覚に関連する「嗅球」と呼ばれる部分に密接な関係を持つ「大脳」を発達させることになりました。結局哺乳類は、身体全体の大きさの割に大きな「大脳」を持つ結果となりました。

このような哺乳類の感覚のあり方は、恐竜の子孫である鳥達がほとんど嗅覚に頼らず、視覚が最大限に発達しているのと対照的です。

鳥たちは食物が見えたら接近して食べればいいし、敵が見えたら飛んで逃げればいっけいわけで、記憶の蓄積や、思考に基づいて行動する必要は小さく、大脳はあまり発達していません。つまり鳥たちは、「済んでしまったことなど、もう気にしなくていい」のです。

「そして今、昼の世界で。」

6,500 万年前の恐竜絶滅後、昼の世界に開放された哺乳類たちですが、長い夜の時代の影響で、今でも色彩感覚が乏しい動物が多いのです。

普段、あなたは脳が小さな鳥達を忘れっぽく愚かだと感じたり、色彩感覚の乏しい獣達を哀れと思いついていませんか？

でもそのように「考える能力」を持つことができたのは、私達の遠い祖先が恐竜におびえながら暮らしていた、1億5,000万年もの「長い夜」があったからなのです。

プロトファスマ：【*Protphasma*】
ゴキブリの祖先

